広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XIV 2002. 3. 23

協奏曲選曲にみる学生オーケストラの変化

井手口　彰　典
（本講座博士課程前期在学）

Ⅰ．はじめに

ある特定の文化ないし社会の状況と、そこで受容される音楽とは、密接に関係している。異なった地域、異なった文化圏下では、奏でられ歌われる音楽もまた異なったものとなるし、また一つの地域内であっても、時代の流れとともに文化が変化すれば、当然音楽にもその影響が現れる。アラン・P・メリアムはその著作『音楽人類学』の中で、「文化は動態である」とし、「いかなる文化も時代を超えた変化の力学から逃れることは出来ない」(*1) と述べている。時間の経過に伴う文化や社会状況と、そして音楽の変化は、不可避なものだと言ってよいだろう。(*2)

そのような文化ないし社会と音楽との変化の関わりは、今日の我々が生活する文化・社会においても決して例外ではない。考察の対象を日本という特定の地域における特定の音楽ジャンルに絞ってみても、時代の変遷に伴いその受容のされ方は変化してきた。変わりゆく音楽受容の様相を追うことで、それが文化からどのような影響を受けたのか、なぜそのような変化を辿ったのかを考察することは、その文化と音楽について熟考するに当たって極めて重要なことだと言ってよい。

筆者は以上のような認識に立ち、特に日本におけるクラシック音楽の受容の在り方を文化や社会の状況の変化に照らし合わせながら研究を行った。その過程で本論文では特に、学生オーケストラによる協奏曲の演奏に焦点を当て両者の関係を考察することを目的とする。

明治期の西洋文化の導入に伴い、その１つとして日本に紹介されたクラシック音楽は、第二次世界大戦後、戦後西洋楽器が普及し音楽教育が行き渡るようになった結果、次第に一般化するようになった。明治期に付与された「高尚な」というイメージは残ったものの、望めば誰でも比較的容易に演奏者として参加できるようになったのである。だが、クラシック音楽でありさえすればどのようなものでも、日本で広く受容され演奏されるようになったと言うわけではない。同じクラシック音楽というカテゴリーの中においても、曲毎に、あるいはジャンル毎に、受容に際しての取捨選択が起きている。それはまさに、戦後日本という文化・社会に独自の受容のされ方だと言ってよいものである。

戦後日本という文化・状況に特有のクラシック音楽の受容の在り方には、どのような特質があったのか。この問題を検討するためには、プロオーケストラの選曲を対象として分析するのはあまり適切ではないだろう。彼らが職業として音楽を演奏する集団でるある以上、時代毎の流行に多少なりとも影響されるとしても、選曲において自分たちの都合のみに則った取捨選択は比較的起きにくいと考えられるからである。それよりも、アマチュアの演奏家に目を向けた方が、時代時代の影響をよりストレートに見て取ることが

できるのではなかろうか。アマチュアの演奏会の選曲結果は、その受容の変化の過程を映す一つの鏡であり、それは彼らが置かれていた時代毎の状況を物語っていると考えてよい。

戦後日本のアマチュアオーケストラは、市民オーケストラと学生オーケストラという2つに大別してよいだろう。このうち市民オーケストラは、現在では数も増え見逃すことはできない規模に成長してきているが、それは特に高度成長期以降の顕著な動向である。戦後間もない時期に活動を開始し、アマチュアにおける日本のクラシック音楽演奏の牽引役を果たしたのは、旧帝国大学や有名私立などの大学オーケストラであった。

以上のような理由から本論文では、学生オーケストラによる演奏曲目の変遷を対象とし、特にその中でも受容のされ方に大きな変化が生じている協奏曲を中心に考察を行う。研究方法としては過去の演奏会資料の分析に加え、アンケート調査とインタビューを合わせて行った。この研究によって、協奏曲というクラシック音楽の一ジャンルが、日本の文化・社会の変化にともないどのように受容されてきたのかを明らかにすることができるものと考える。またそれは、今後日本におけるクラシック音楽受容の流れというより大きな問題を展望することにも貢献するものであろう。

Ⅱ. 調査対象と収集資料

本論文において研究対象とする学生オーケストラとは〈大学生が、課外活動として、各大学毎に、あるいは他大学と連携しながら運営する、管弦楽演奏を目的としたオーケストラ〉として定義する。マンドリンオーケストラ、吹奏楽団、教育学・芸術学の授業で編成されたオーケストラ、中高生によるオーケストラ等はこの範疇に含まない。学生オーケストラを研究の対象に選んだのは、既に述べた点以外にも以下のような利点が挙げられるからである。

①アマチュアであるために技術的・経済的・人員的等の面でその活動がプロよりも様々な制約を受けやすく、社会状況の変化をより反映しやすい。

②一定の年齢層によって構成されているため各団体毎の比較が容易である。

③多くの場合、各大学に1つずつの割合で団が存在し、サンプルとして取り上げやすい。

全国に多数存在する学生オーケストラの中から、本論文では対象を近畿圏一帯の学生オーケストラに絞り調査を行った。それは以下の2点の理由による。

①近畿圏が関東圏と並んで人口の集中している地域であり、多くの大学オーケストラが比較的近接して存在している。

②関東圏ほど大学の数が多くなく、より全体数に近い数をサンプリングしやすい。

近畿圏では、まず阪神学生オーケストラ連盟に加盟しており、過去10年以上に渡り安定した演奏会活動を行っている団を調査対象とした。連盟に加盟していても、過去10年以内に新設されたオーケストラや、演奏会活動が不定期であったり休止中になっているオーケストラは対象から外した。これに、連盟に未加

盟ではあるが無視できない重要な存在として、京都大学、同志社の両学生オーケストラを加えた。

以上の条件によって対象として取り上げたのは、次の14団体である。

大阪市立大学交響楽団	大阪外国語大学管弦楽団
大阪大学交響楽団	大阪府立大学・大阪女子大学合同交響楽団
関西大学交響楽団	関西学院交響楽団
京都大学音楽部交響楽団	近畿大学文化会交響楽団
甲南大学文化会交響楽団	神戸大学交響楽団
同志社大学交響楽団	奈良女子大学管弦楽団
立命館大学交響楽団	和歌山大学交響楽団　（50音順）

なお本論文で研究の対象とする期間は、第二次世界戦後（1945年以降）から現在までとする。これは、対象のうち伝統ある幾つかの団を除き多くの学生オーケストラが戦後からその活動を開始しているためである。

以上の研究対象の各団に関して、考察を進めるに当たっての一次的な資料として、各団の過去の演奏会とそこで演奏された曲目を収集・整理した。資料は各団がウェブページ上に公開している過去の演奏会記録をダウンロードして用いたほか、公開されていない情報や欠損に関しては必要に応じて各団の代表者（団長、部長、総務等）に連絡をとり記録を公開してもらった。

収集した資料は、以下の条件に沿って整理した。

・本論文における演奏会とは、次のようなものとする。

　1．学生オーケストラのみで開催する定期演奏会

　2．定期演奏会に準じる形で行われる、サマーコンサート、スプリングコンサート、プロムナードコンサート、演奏旅行での公演、等。（学校祭での演奏や合唱との合同演奏会などは本論文では扱わない）

・同一もしくは極めて似通ったプログラムで近接した時期に行われた演奏会（例えば演奏旅行先での複数の公演や、定期演奏会の２カ所での開催）は、演奏曲目をまとめて１つの演奏会として集計する。

・資料が欠落し演奏内容が不明な演奏会は集計の対象外とする。

・演奏年は全て「年度」に換算する。つまり2000年１月に行われた演奏会であっても、本論文では1999年度のものとして扱う。

Ⅲ．学生オーケストラで減少する協奏曲

以上のように資料を整理した結果、時代毎に各団にある程度共通した変化が生じていることが見えてくる。注目に値するのは、近年になるに従い顕著になる協奏曲（*3）の減少である。

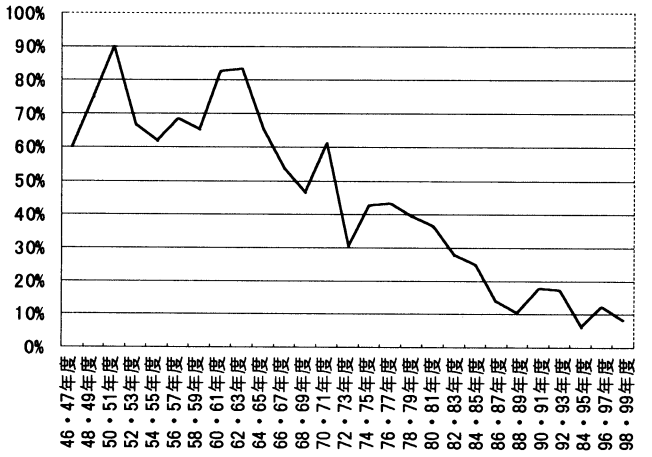
【表１】は、各大学オーケストラが行った全演奏会数及びプログラムに協奏曲が含まれた演奏回数を数え上げ、次の算式から協奏曲演奏の頻度を「演奏割合」として算出したものである。

$$演奏割合（\%）＝\frac{協奏曲の演奏回数}{演奏会の数}\times 100$$

演奏割合の数値が高いほどよく演奏会を取り上げたことを意味し、例えば100%では全ての演奏会で協奏曲が取り上げられたことになる。

グラフの右、戦後間もない時期でグラフの変動が激しいのは、演奏会の数が少なく一回一回の演奏会での協奏曲の有無が露骨に結果に反映されてしまうためである。しかし'60年代に入ると、演奏回数も増え比較的なだらかに変化するグラフが描かれるようになる。'70年あたりを境に明らかに協奏曲は減少を見せているのである。

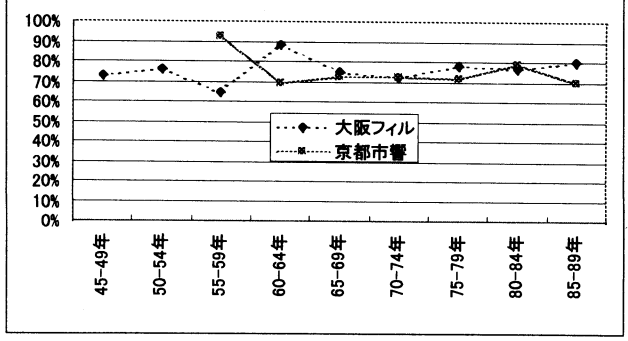
【表１】協奏曲演奏割合の減少の様子



この協奏曲の減少という事態は、学生オーケストラに限ったことなのであろうか。それを確かめるために、参考資料としてプロオーケストラにおける協奏曲演奏の状況を調べた。【表２】は、大阪フィルハーモニー交響楽団（旧関西交響楽団）と京都市交響楽団の、設立時から'89年までの定期演奏会での協奏曲の演奏回数を調べ、学生オーケストラの時と同じ要領でその演奏割合を算出したものである。期間は５年おきに区切った。なお、近畿圏で'70年代以前から現在に至るまで活動を行っているオーケストラは、両団のみである。

これを見る限り、今ここで問題となっている'70年付近からの協奏曲の減少はプロの演奏会では生じていないことが分かる。この結果から、協奏曲減少という問題は学生オーケストラという特定の社会的状況の中において生じている現象だと考えることができる。それではなぜ、学生オーケストラの中でのみ、そのような変化が生じたのか。そこに存在する学生オーケストラに独自の減少の要因とは、一体何なのか。

【表２】関西のプローケストラの協奏曲演奏



V．学生オーケストラによる協奏曲演奏の実際

この減少傾向を考察するに当たり、まず「現在」という視座から、各団がどのような条件下で協奏曲を演奏し、どのような意識で協奏曲を捉えているのかを確認した。そのための方法としてはじめに、幾つかの団の代表者（部長・団長・総務等）に対してインタビューを試みた。対象は大阪及び兵庫の学生オーケストラとし、最終的に以下の計７団体へのインタビューを行うことができた。（＊4）

大阪市立大学交響楽団	大阪外国語大学管弦楽団
大阪大学交響楽団	関西大学交響楽団
関西学院交響楽団	甲南大学文化会交響楽団
神戸大学交響楽団	（50音順）

インタビューの結果の中から、協奏曲について考える際に重要であると思われる内容を項目毎にまとめてみると、次のようになる。

・選曲の進め方について

演奏会に取り上げある作品の選曲は、いずれの団も全団員から公募している。またどの団においても、提出された候補曲は団員の中から選ばれた数名（ないし十数名）の人間によって選曲会議にかけられ、絞り込まれたのち最終的にプログラムが決定される。その際、どの団でも選曲に関する決定権はこの会議に一任されており、全体投票による多数決制などを採るオーケストラはない。

・協奏曲を選択するに当たって

いずれの団も、選曲の際に協奏曲の提案を禁止したり、選曲会議の際に無条件で協奏曲を対象から除いたりすることは一切行っておらず、作為的に協奏曲を回避している団はない。

・ソリストについて

協奏曲演奏の際のソリストは、対象とした７団体のうち６団体までもがプロを呼ぶことを念頭に置いている。しかし大阪市立大学だけはこれに当てはまらず、過去数年の大阪市大オケが演奏した協奏曲のソリストは、トレーナーないしトレーナーが紹介した音大生が担当している。

・協奏曲を取り上げない理由について

各団のインフォーマントが解答した協奏曲減少の理由は、「自分たちの演奏会をソリストに奪われてしまうのが嫌」、「プロのソリストを呼ぶとそれだけ費用が多くかかってしまう」、「ソリストは常に練習には参加できないので普段の練習で合奏の楽しさが味わえず、また限られた合奏で音楽を仕上げるのが困難」、「協奏曲は編成が小さく、団員全てを演奏会に参加させるのが難しい」等である。

以上のような全体的傾向を踏まえた上で、次にインタビュー対象オーケストラの近年の協奏曲演奏の実際の状況がどのようなものなのかを団毎に整理し、まとめた。それによると、協奏曲を取り上げることがほとんどなくなっている大阪外国語大学、関西大学、関西学院、甲南大学、神戸大学では、近年は候補曲

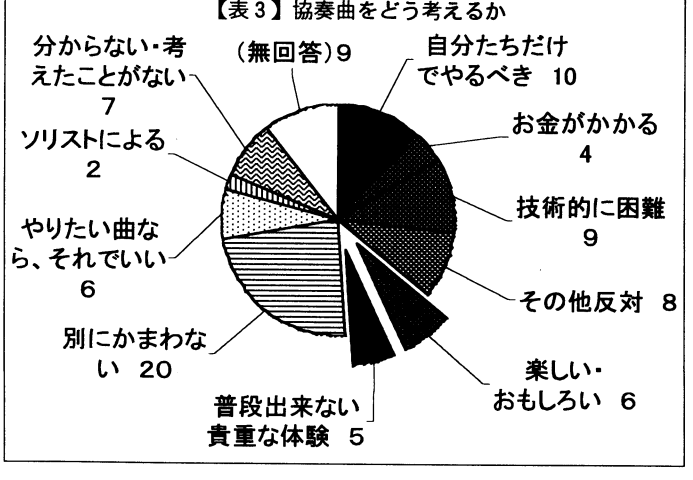
に提案されても選曲の過程で淘汰され消えていくか、そもそも選曲候補にすら協奏曲が取り上げられないのが常となってる。'97年に関西学院でトロンボーン協奏曲が取り上げられているが、これはトレーナーであるプロの音楽家からの強い推薦があった結果である。また、'99年に甲南大学がプッチーニのアリアを女声独唱と共に演奏しているが、しかしこれも指揮者の現田茂夫が妻でソプラノ歌手の佐藤しのぶとの競演をオケに持ちかけた結果である。このように、強い発言力を持った学生以外の人物からの働きかけがない限り、これらの団では協奏曲が他の管弦楽曲を押しのけて選曲会議で残ることは稀である。

大阪大学と大阪市立大学は、今回のインフォーマントの中では比較的頻繁に協奏曲を取り上げているが、両者の内実は異なっている。大阪大学では数年周期で定期的に協奏曲を取り上げるスタイルが定着しており、数年おきに協奏曲を取り上げるという暗黙の了解ができている。一方の大阪市大では、前述の通りソリストにプロを呼ばずトレーナーや音大生を起用しているため、普段の練習にも頻繁にソリストを招くことができる。その結果前述の協奏曲を嫌がる要因のうちの幾つかが解消されるので、比較的容易に協奏曲を取り上げることができるのである。

以上のインタビューを通じて、協奏曲を取り巻く現在の状況は大筋において掴めた。続いてこのインタビュー結果を裏付けるために、各オーケストラの団員に対してアンケート調査を行った。アンケートは、阪神学生オーケストラ連盟の主催で毎年行われる「オケ連合宿」と呼ばれる合宿に参加した団員を対象に行い、15団体86人から回答を得た。(*5)

このアンケートの中で、「『協奏曲』を大学オケが取り上げることについてあなたはどうお考えですか」(原文通り)という質問に対し、次の【表3】のような解答を得た。グラフのうち、やく40%が協奏曲に否定的な意見、15%が肯定的な意見で、グラフ左半分を占める5割は特に関心がない・一概に賛否は判断できない等の中立な意見である。約半分を占める中立派層を無視して考えると、否定的意見は肯定的意見の倍以上となっている。各団で選曲が行われる際、仮に候補曲の中に協奏曲の名が挙がったとしても、これでは絞り込まれる過程で選択肢から落とされるのは当然と言える。反対理由の内容を見てみると、「自分たちでやるべき」、「お金がかかる」、「技術的に困難」などが挙げられており、これは団の代表者へのインタビューの結果と一致する。

【表3】協奏曲をどう考えるか



このインタビューとアンケートを通じて、なぜ「現在の」学生オーケストラは協奏曲を取り上げたがらないのか、その理由を掴むことができた。それをまとめると、次のようになる。

i　自分たちの演奏会は自分たちで創りたいと考える風潮が強いこと(自立面)。

ii　ソリストにプロを呼ぶことによる出費の増加を望まないこと(経済面)。

ⅲ　ソリストは常に練習に参加するわけではないため、オーケストラが限られた回数の合わせの中でソリストに演奏を揃えるのが難しいこと（技術面）。

ⅳ　ソリストが練習に常に参加できないことが、普段の合奏の楽しみを半減させてしまうこと（娯楽面）。

ⅴ　全ての団員を演奏会に出演させるためには、小編成の場合が多い協奏曲は適当でないこと（編成面）。

これらの理由が重なり合い、「現在の」学生オーケストラの協奏曲離れが生じていると考えられる。

Ⅴ.「過去」の状況と協奏曲演奏

しかしそのような現状がある一方で、「過去には」頻繁に協奏曲が取り上げられていたという事実がある。変化する社会と音楽との間に何らかの関係があるならば、協奏曲が頻繁に取り上げれられていた'70年代以前の学生オーケストラは、当然現在とは異なる状況下にあったということになる。それは一体どのような状況だったのだろうか。「過去」から「現在」への時間の流れの中で、学生オーケストラの何が変化し、何が協奏曲の減少を招いたのだろうか。それを知るために、筆者は当時の学生オーケストラの事情をよく知っており、かつ現在まで学生オーケストラに関わり続けている方にインタビューを行った。

インフォーマントになって頂いたのは、関西学院交響楽団顧問で関西学院大学文学部（音楽学）の畑道也教授（以下敬称略）である。インタビューは2000年10月25日、関西学院大学文学部校舎内の美学研究室で行った。畑はチェロが演奏できたため中学３年生頃（'56年）から同団の活動に参加、大学入学後は'61年から'63年まで学生指揮者を務め、卒業後も'72年から'81年までの10年間常任指揮者として団の指導に当たってこられた。また、現在は同団の顧問を務めている。インタビューの中で重要となる内容を整理すると以下のようになる。なお、畑の発言はなるべくその趣旨をを崩さないよう留意しながら筆者がまとめ、「カッコ」で示した。

畑が学生として関西学院交響楽団の活動に参加していた'50年代後半から'60年代前半頃、同団の団員数は約30名程度で、不足分の奏者は演奏会直前になってからの他大学生や卒団生によるエキストラでカバーしていた。畑自身、中学生の時からチェロの腕を買われ活動に参加していたが、それもこの団員不足という事情によるものである。

演奏技術は現在と比べ遙かに低く、「定演で止まらず演奏できたら大感激」という言葉からもその大体の状態を推測することができる。

経済力に関しては、「当時の学生は演奏会に必要となる費用を負担するほど経済的に豊かでなかった」。現在でこそ、ほとんど全ての学生オーケストラにおいて演奏会の費用は出演者が支払う演奏会ノルマで賄われているが、当時は学生が「阪急の梅田駅の周辺で切符を売ったり」、「心斎橋筋の商店街を軒並み歩いてプログラムの広告もらったり」することで必要経費を絞り出していた。

では、こういった当時の学生オーケストラの状況が、協奏曲の頻繁な演奏とどのように関係しているのか。以下、３つの側面から考察を行う。

§経済力

畑によれば、協奏曲を頻繁に演奏していたのは、何よりも経済的な問題によるところが大きい。前述の通り当時の学生たちには演奏会を開くだけの金がなく、そのためチケットを売って費用を賄わなければならない。そこで重要になるのが、協奏曲で華やかな名人芸を披露するソリストである。プロのソリストを呼ぶことで、その知名度を利用してある程度のチケットを捌き、またソリストに頼んでその伝でチケットを売ってもらい、収益を上げようとしていたのである。しかしこれは、「ソリストを呼ぶとお金がかかる」という現在の常識で考えると矛盾を孕み、本末転倒になってしまう。このことを理解するには、当時の音楽界の状況をさらに深く検討してみる必要がある。畑によれば、ソリストの出演料は、もちろん支払いはするものの「我々は学生だからということで、うーんと安くして」もらっていた。その具体的な金額については、「今のお金でいうと3万円くらい」である。現在ではプロのソリストを呼ぼうと思えば数十万円の出費を覚悟しておく必要があるので、当時の出演料は相当安かったと言える。ではなぜ、そんなに安い金額でソリストを呼ぶことができたのか。

その理由は、当時のプロの音楽家の数にある。'60年前後には、近畿圏のプロオーケストラには大阪フィルハーモニーの前身である関西交響楽団と設立間もない京都市交響楽団が存在したのみであり(*6)、若手のソリストにとって協奏曲をプロのオーケストラと共に演奏する機会など滅多にないことだった。そこでソリストは、アマチュアとの共演では自分の正式なキャリアにならないにも関わらず、「協奏曲を演奏したという事実を得るために」学生オーケストラからの破格の誘いに応えたのである。これは、当時の音楽家を取り巻く時代背景が可能にしたことであり、プロの演奏家が増え演奏会も頻繁に行われるようになった現在では起こり得ない現象である。

§演奏技術

このように協奏曲を頻繁に演奏する最大の理由は経済力の問題にあったようだが、畑よればこの他にも幾つかの要因を挙げることができる。その一として考察を要するのが、技術力に関しての問題である。畑はインタビューの中で「協奏曲は技術的に易しい」と述べ、演奏技術の低い当時の学生オーケストラは「そういう曲を選んでいた」と説明している。しかしこのことも、協奏曲を演奏するのは難しい、という現在の団員の声と相反するものである。これはどういうことなのか。

現在我々が、協奏曲は難しい、と発言する際、それは協奏曲の何が一体難しいと言っているのだろう。先に触れたアンケートの中で、協奏曲は難しい、と回答した者はその理由として「ソリストと釣り合うほどの音楽性がない」、「ソリストとの少ない合奏の場で音楽を仕上げるのが困難」等を挙げている。ここから見受けられるのは、プロの演奏家がその実力を十分に発揮できるだけの伴奏を務めたり、音楽的により洗練されたものを創ったりするには、自分たちの力では不十分だ、という認識である。

これに対して過去はどうだったのか。畑は当時の楽団のレベルが低かったことに言及し、学生にとっては「弾ければいいわけだし、ズレずに最後まで行ければいいわけだ」ったと説明する。確かに協奏曲においては、オーケストラはいわば伴奏として機能することも多く、とりあえず譜面通りに音を鳴らすという次元での話なら他の管弦楽曲などに比べ比較的容易な場合が多いのは事実である。もちろん協奏曲とて曲

によってはオーケストラ側にも難しい演奏技術が要求される場合もあり一概に言い切ることはできないが、「とりあえず音にする」というレベルの意識下にあっては、協奏曲は容易な曲が多く含まれる魅力的なジャンルだったのだ。

§編成

第3の要因に、編成という点が挙げられる。比較的コンパクトな編成で演奏できることは、団員数の少ない当時としては有難いことだった。ただしこれは、上述の2つの要因に比べて積極的な理由とはなり得ない。編成の小ささは何も協奏曲のに限った特徴ではなく、単に編成の小さな曲を望むだけなのであれば管弦楽曲にせよ交響曲にせよ幾らでも選択肢はある。ただ、協奏曲が上述2つの要因に加えてさらに編成の小さい場合が多いとなると、それは団にとって願ったり叶ったりであり、協奏曲を一層頻繁に演奏する促進材料としては十分に機能したと考えられる。

以上で見てきたような各々の理由により、当時は頻繁に協奏曲が演奏されていた、と判断することができる。そのような協奏曲を当時の学生はどのように見ていたのか。畑によれば、「有難い」、「これで我々が弾ける」、そういった意識であったようである。選べば経済面、技術面、編成面などで演奏会の開催を有利にしてくれる有難いジャンル、それが協奏曲だったのだ。

なお、ここで述べられていることは、関西学院交響楽団に限ったことではなく「どこも似たり寄ったりの状況だった」と畑は証言している。

Ⅵ.「過去」から「現在」への移行と、その検証

こうして見てくると、協奏曲は「現在」と「過去」という各々の状況下で、全く異なった捉えられ方をしていたことが分かる。それは方や自分たちの主体性を奪い、高い出費を必要とし、出演者数を限ってしまう曲であり、方やチケットの販売を促進し、容易に演奏できる曲である。この両状況下での協奏曲の捉えられ方の相違こそが、協奏曲減少の重要な鍵となっているのではないか。

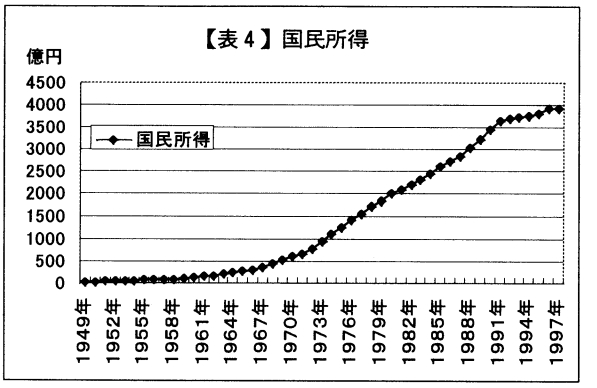
では、そのような「過去」の状況が、一体いつから「現在」の状況に推移したのだろうか。畑は「正確には思い出せないが」と前置きをしたあと、それは畑の「大学卒業後から徐々に起こり始め、非常に顕著に現れてきたのが大学紛争後」であったと証言している。団員が増加し、演奏技術が上がり、経済的にも豊かになってきたのは、大学紛争終結後、すなわち'70年代からだというのだ。そしてこれは、協奏曲演奏が減少を開始する時期と見事に一致するのである。

だが、協奏曲の減少と社会的状況の変化との関係を結論付ける前に、「過去」の状況が時代の流れと共に「現在」へ推移していく様子を、もう少し詳しく検証してみたい。つまり「過去」と「現在」を繋ぐ「推移の過程」を、幾つかの側面から確認するのである。

検証1．大学生の経済状況　－ いつから「豊か」になったのか －

戦後の日本が徐々に経済的に豊かになっていったのは今更言うまでもない事実だが、それはいつ頃の、

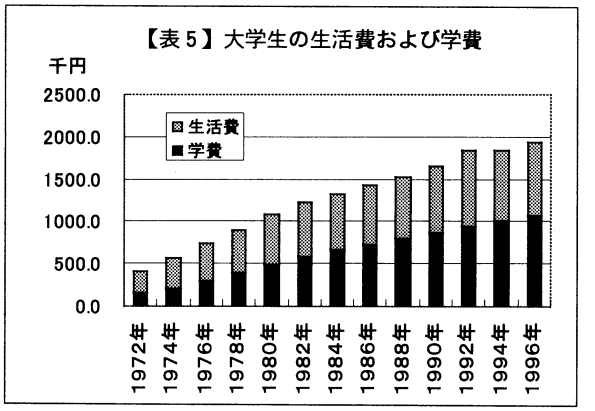
そしてどの程度のことなのか、ここで確認しておく。【表４】は日本の国民所得の推移を示したグラフである。はじめ横這いに近かったラインが鎌首をもたげ始めるのが '60 年代であり、'70年以降は安定した上昇を続けるようになる。これにより少なくとも日本という国全体は、'70年代以降、いわゆる高度経済成長の時期に入り加速度的に豊かになっていったと言ってよい。では大学生に限ってみた場合はどうか。



【表４】国民所得

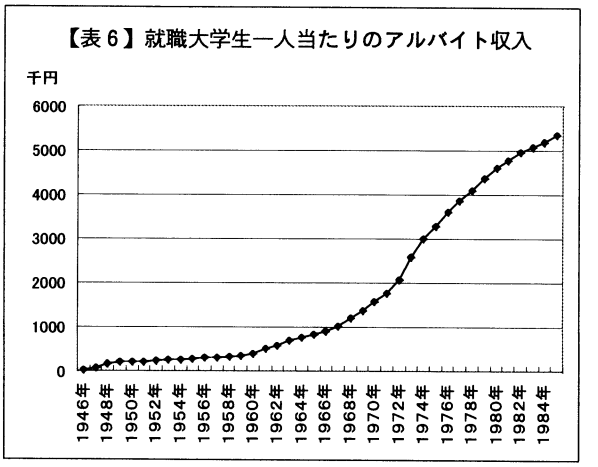
地方教育費調査報告書　平成９会計年度

【表５】は'72年以降の大学生一人あたりの学費を２年おきにまとめたものである。'60年代の資料は手に入れることができなかったが、学費の上昇と平行して生活費にもより多くの金額が盛れるようになっており、経済的に豊かになっていく様子を窺うことができる。また直接的な資料ではないが、【表６】はアルバイトをしている大学生一人あたりの収入の推移である。これを見ると、先ほどの国民所得の推移と極めて似た形を取っていることが分かる。大学生も、高度成長の恩恵に浴していると見て間違いないだろう。以上のようなことから、大学紛争終結後、つまり'70年代以降、学生が経済的に徐々に豊かになっていったという畑の言葉を裏付けることができる。



【表５】大学生の生活費および学費

大学と学生　通巻２１２号
日本子ども資料年鑑　第六巻
以上を基に筆者が作成



【表６】就職大学生一人当たりのアルバイト収入

大学と学生　通巻252号

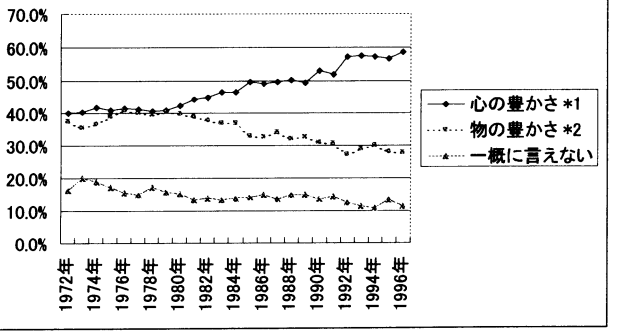
さらに、社会が豊かになる様子は人の意識の変化からも伺える。【表７】は、国が実施している世論調査で心の豊かさと物の豊かさのいずれを重視するかを聞いたものである。'75年までは物質的な豊かさを求める声が心の豊かさ凌いでいたが、翌年からはほぼ横並びの状態となり、'79年以降は逆転して心の豊かさを重視する人が増えていることが分かる。音楽活動は、心の豊かさに深く関わる活動である。心の豊かさを求める余裕が人々の間に生じたということは、そのぶん物質的には満たされた状態に近くなったと考えられるだろうし、同時にそれだけ音楽活動も盛んになったと想定される。

検証２．団員数の拡大

－ 編成から見えてくるもの －

【表８】は、'99年度の阪神学生オーケストラ連盟団体の各団員数（概数）である。当然ながら団毎にその人数はある程度の差があるが、今回の研究対象に含めた団は全て60人を上回っており、標準的な２管編成のオーケストラを組むのには十分である。一方で、立命館大学交響楽団の記録によると、'55年に団員12名、'58年に23名、'60年に至って初めて40人近い団員数となった事実が記載されている（*7）。以上２点を考え合わせれば、各団の団員数の増加は疑いようがなく、「団員数は30名程度で、それはどの団でも似たり寄ったり」だったという'60年代に関しての畑の証言は裏付けられる。

【表７】豊かさに対する意識



*1. 物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい

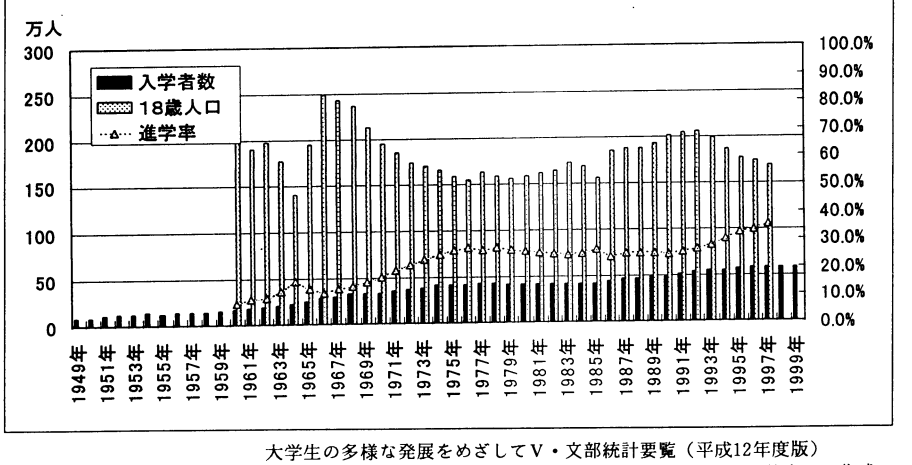
*2. まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい月刊世論調査３月号

【表８】阪神学生オーケストラ連盟加盟の各団の団員数

大阪私立	70	大阪外大	80	大阪大学	130
大阪府・女	35	関西大学	120	関西学院	110
近畿大学	90	甲南女子	10	甲南大学	90
神戸学院	30	神戸大学	100	滋賀大学	45
奈良女子	60	立命館	130	龍谷大学	50
和歌山大学	70				

これ関連して、【表９】をまとめた。これは戦後の18歳人口及び大学進学者数、そしてそこから算出した進学率の推移を示すグラフである。18歳人口は２度のベビーブームを頂点とする波状線を描き、近年減少の様相を呈している。しかし一方で進学者数はコンスタントに上昇を続け、進学率も'99年には35%に達している（この表には短大や専門学校への進学者数は含んでいないので、高等教育機関全体への進学率はさらに高いものになる）。大学生の数は、若者の数が減

【表９】 大 学 生 数

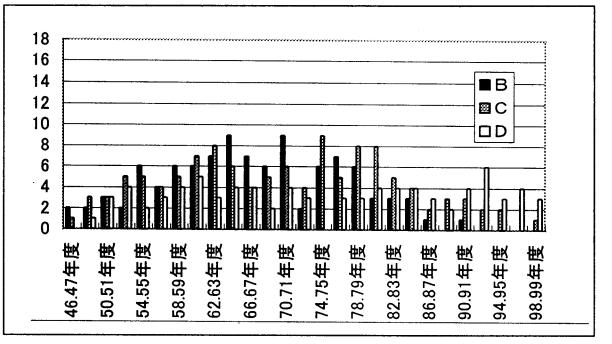


大学生の多様な発展をめざしてＶ・文部統計要覧（平成12年度版）
以上の資料を基に、井出口が作成

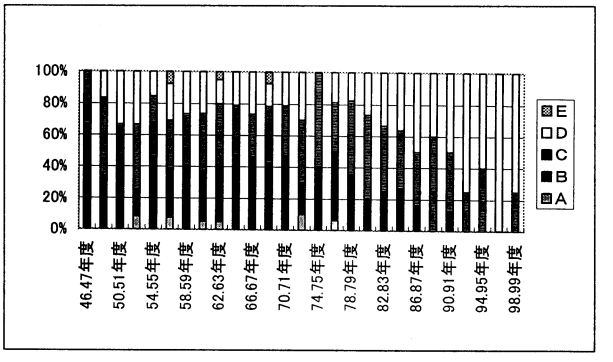
りつつある中にあって、なお増加を続けているのである。ここからも、大学生の増加に伴いオーケストラに加わる学生の数も増えていったことが推測できる。

ではこの団員数の増加と協奏曲との間には、直接的な関係が存在するのだろうか。それを示すために【表10】と【表11】を作成した。【表10】は各団で取り上げられた協奏曲を、その編成によって4つのグループに分け、各々がどれだけ取り上げられたかを2年毎にまとめたものである。Aはバロックコンチェルト、Bは木管楽器が2管編成に満たないもの、Cは木管が完全2管編成でトロンボーンを含まないもの、Dは3本のトロンボーンを含むものを示している。当然、Dが最も編成の大きな協奏曲である。【表11】は、さらに手を加え2年毎の各演奏数の合計を100%とし、協奏曲全体の中でAからDまでが各々どの程度の割合を占めているのかを示したものである。【表10】を見ると、BとCが'70年辺りをそのピークとする山型を描いているのに対し、Dは'60年代以前から比較的なだらかな推移を示しており、全国合計ではむしろ増加さえ見せている。また【表11】を見ると、比較的一定した割合を占めるCを中心に、BとDが斜めに入れ替わっている様子が明確に見て取れる。ここから、過去には小編成の協奏曲が好んで取り上げていたが、団員数が増加したことで全ての団員をステージに乗せる都合が生じ、小編成の協奏曲を敬遠するようになったことが推測できる。一方で編成の大きな協奏曲はそういった影響を受けることがないため、比較的コンスタントな演奏回数を現在に至るまでキープ出来ているのだろう。このように、協奏曲の演奏と団員数の間には明らかな影響関係を確認することができる。

【表10】編成別に見た協奏曲の演奏回数



【表11】編成別に見た協奏曲の演奏割合



A：バロックコンチェルト
B：木管が完全二管編成に満たないもの
C：木管が完全二管編成以上で、3本のトロンボーンを含まないもの
D：3本のトロンボーンを含むもの
E：編成が不明なもの

補足：技術力向上の検証に代えて

では、ここまでの2つの検証で明らかにしてきた大学生の経済力や団員数の増加という事実に並んで、その演奏技術の上昇も証明し得るだろうか。これは極めて難しい。残っている録音からオーケストラの巧拙を点数付けしようにも、その基準は主観的なものにならざるを得ないし、全ての演奏会の録音が残っているわけでもない。演奏会毎のでき不出来もあるだろう。こういった理由から、信頼の置ける資料として過去の録音を用いることはできない。

このような直接的な資料にはならないが、間接的に技術力の向上を示唆し得る現象として、例えばグスタフ・マーラー(1860-1911)の交響曲の演奏が近年とみに増えてきたことなどを提示することが、一つの指標として可能であろう。マーラーの作品には巨大な管弦楽編成と同時に、個々の演奏者に対して高い技術力が要求されるからである。しかし、学生オーケストラにおけるマーラー演奏は非常に込み入った様相を呈しており、またこの場で考察を展開するにはあまりに大きすぎる内容だと思われる。したがって、今回は技術力向上を示唆し得る可能性の提案にとどめておきたい。

Ⅶ. 結　論

学生オーケストラによって取り上げられる協奏曲の数は、過去数十年の間に明らかに減少した。その原因は、学生オーケストラを取り巻く文化・社会の状況と、それに伴う団員の協奏曲に対する捉え方とが、時代の推移に伴い変化したことにある。それは、既に論じたように一つの要因によって引き起こされるものではなく、文化・社会が変化する過程で生じる様々な要因が複雑に絡み合って起きた現象だと言ってよい。すなわち音楽活動に参加する学生の数・経済状況・演奏技術・音楽に対する意識、プロ音楽家とプロオーケストラの数などである。

以上のように、本論文では学生オーケストラによる協奏曲選曲を対象とし、動体としての文化・社会と、その文化・社会内で受容される音楽との密接な関係を捉えることができた。しかし、既に述べたとおり文化状況・社会状況は今この時も絶えず変化を続けているのであり、そこで受容される音楽もまた然りである。山口修はその著作『応用音楽学』の中で、音楽と社会との関係を考える従来の音楽社会学に対し、より一層の未来指向性を打ち出すことを目的とした応用音楽学を提唱している(*8)。また、メリアムは前述の著作の中で、音楽が社会的・文化的状況の影響を受け変化していくことを正しく認識する必要性があると主張し、次の様に続けている。(*9)

> 人間の経験における恒常的要素として変化を見る限り、その表現自体につけ加えることは何もない。変化を遅らせようとしたり、妨害しようとしたりしていくら努力しても、変化は起こるのである。(中略) 変化の不可避性を嘆くことに精力を費やすとすれば、エネルギーの浪費である。私達ができる限り幅広く、そして迅速に記録することは大切である。しかし、今、非難の的になっている変化の過程そのものを研究することは、さらに大切である。
>
> (藤井知昭・鈴木道子訳　傍点筆者)

現在、あるいは今後我々を取り巻くことになる文化状況は、そこにどのような音楽受容を形成するのか。我々は今後、どのような音楽と接し、どのような演奏していくのか。過去から現在までを眺めることで得られた研究成果に、現在から未来へを眺める視点を重ね合わせることで一体何が見えてくるのか。そういった我々の未来を見据える視線は、単に「現在とは違う過去」を眺めていただけでは産まれてはこない。それはメリアムの言う「変化の過程そのもの」の研究を続けていく中で初めて確立することができるのだろう。本論文では、この変化の過程の問題を扱ったわけであるが、しかし、残念ながら今回はその過程を追

うだけに止まり、そこから先に見いだすべき成果を、つまり山口の言う未来指向性を付与させることはできなかった。「今後」学生オーケストラは、ひいては日本におけるクラシック音楽の受容は、どのような変化を迎えるのか。これらについては、今後さらに検討を重ねていきたい。

［註］

(*1) メリアム(1980),p.367.

(*2) 例えば「それぞれの時代、それぞれの文化における音の変化の実態を詳細に追跡し、その要因を具体的な事例に則して考え」(p.8.)るために編まれた、櫻井・山口(1996)などを参照。

(*3) 協奏曲として見なすか否かは、音楽之友社の最新名曲全集第８～10巻「協奏曲」に作品が収録されているかどうかで判断した。ただし、バロックコンチェルトに関しては、ソロ・コンチェルトに限りここに加え、コンチェルト・グロッソ（合奏協奏曲）は対象外とした。また、オーケストラと独唱声楽による作品は、協奏曲ではないがオケ全体に対して一人の演奏家が同等ないしそれ以上の重要な役割を担う作品であるので、今回の研究ではここでは協奏曲と同列に扱い集計に加えた。

(*4) インタビューの日時及びインフォーマントは以下の通り。年次は全て'99年。

オーケストラ	インフォーマント	依頼日	実施日	時　刻	取材場所
関　西　学　院	河崎　洋平（総務）	10／11	10／13	15:20-	部室
大　阪　大　学	小野田素大（団長）	10／15	10／21	16:00-	近くの教室
大　阪　市　立	浜田　匡央（部長）	11／3	11／8	16:00-	合奏部屋
神　戸　大　学	倉谷健太郎（団長）	11／3	11／9	18:00-	大学の食堂
関　西　大　学	尾崎　道裕（部長）	11／21	11／26	15:30-	合奏部屋
甲　南　大　学	猪田　恭子（部長）	11／25	11／29	16:00-	学館ラウンジ
大阪外国語大学	吉田沙耶香（団長）	11／30	12／2	12:00-	部室

(*5) アンケート調査に関する委細は以下の通り。

実施：２０００年２月２９日から３月３日まで

場所：和迩浜青少年会館（滋賀県滋賀郡志賀町）

方法：阪神オーケストラ連盟が主催する合宿に集まった各団の団員に対しアンケートを配布し、提出を依頼。

回答者の所属オーケストラ：

大阪大学	１１	大阪市大	2	大阪外大	2
府立・女子	2	関西大学	１４	関西学院	１４
近畿大学	5	甲南女子	5	甲南大学	5
神戸学院	3	神戸大学	4	滋賀大学	5
奈良女子	8	龍谷大学	5	和歌山大	1

(*6) 関西のプロオーケストラ発足の年次は次の通り。大阪フィルハーモニー交響楽団：1947年「関西交響楽団」として発足、1960年現在の団名に改称。京都市交響楽団：1956年発足。関西フィルハーモニー管弦楽団：1970年、「ヴィエール室内合奏団」として発足、1982年現在の団名に改称。大阪シンフォニカー：1980年発足。大阪センチュリー交響楽団：1989年発足。

(*7)『立命館大学交響楽団創立四十周年記念誌』(1994),pp7-23.

(*8) 山口修『応用音楽学』(2000),pp.10-11.

(*9) メリアム　前掲　p.22

[謝辞]

今回の研究に関し資料を快く開示して下さった関西の各学生オーケストラの皆さん、インタビューに応じて下さった７人の団代表者の方々、そして畑道也氏に感謝の意を表します。

[参考文献]

Ⅰ：論文・書籍

『最新名曲解説全集』第８巻〜10巻　東京：音楽之友社,1980.

小川昂（編）『新編日本の交響楽団 定期演奏会記録1927〜1981』東京：民主音楽協会音楽資料館,1983.

小川昂（編）『新編日本の交響楽団 定期演奏会記録追補1981〜1991』東京：民主音楽協会音楽資料館,1992.

櫻井哲男・山口修（共編）『音の今昔』　東京：弘文堂,1996.

柴田南雄・遠山一行（共編）『ニューグローヴ世界音楽大事典』第７巻東京：講談社,1994.

根岸一美・渡辺裕（監修）『ブルックナー／マーラー事典』東京：東京書籍,1993.

メリアム、アラン・Ｐ『音楽人類学』藤井知昭・鈴木道子（訳）東京：音楽之友社,1980.

山口修『応用音楽学』東京：放送大学教育振興会,2000.

内閣総理大臣官房広報室（編）『月刊世論調査』１２月号東京：大蔵省印刷局,1999.

日本子供家庭総合研究所（編）『日本子ども資料年鑑』第六巻東京：ＫＴＣ中央出版,1998.

文部省『大学と学生』通巻２１２号　東京：第一法規出版,1983.

文部省『大学と学生』通巻２５２号　東京：第一法規出版,1987.

文部省『地方教育費調査報告書 平成９会計年度』東京：大蔵省印刷局,1999.

文部省『文部統計要覧 平成１２年版』東京：大蔵省印刷局,2000.

文部省高等教育局（編）『大学の多様な発展を目指してＶ』東京：ぎょうせい,1997.

Ⅱ：資料

『演奏会案内』　阪神学生オーケストラ連盟［編］,1998前期、1998後期、1999前期、1999後期

『大阪市立大学交響楽団　第４０回定期演奏会プログラム』大阪市立大学交響楽団［編］,1994.

『大阪外国語大学管弦楽団　第２５回定期演奏会プログラム』大阪外国語大学管弦楽団［編］,1997.

『大阪大学交響楽団　第７０回定期演奏会プログラム』大阪大学交響楽団［編］,1997.

『甲南大学交響楽団　第２０回定期演奏会プログラム』甲南大学交響楽団［編］,1980.

『同志社大学交響楽団　第７０回定期演奏会プログラム』同志社大学交響楽団［編］,1998.

『立命館大学交響楽団創立四十周年記念誌』創立四十周年記念事業実行委員会（編）,1994.

『和歌山大学交響楽団　第３０回定期演奏会プログラム』和歌山大学交響楽団［編］,1998.

『Spielen　No.35』　阪神学生オーケストラ連盟（編）,2000.

Ⅲ：ウェブページ

阪神オーケストラ連盟　非公式ウェブページ
http://www.sam.hi-ho.ne.jp/fromme/okeren/ortop.html
大阪府立大学・大阪女子大学合同交響楽団ウェブページ
http://www.interq.or.jp/classic/e-masaki/
関西大学交響楽団非公式ウェブページ
http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Kouen/1834/kanoke.html
関西学院交響楽団ウェブページ
http://chu-shiba.kwansei.ac.jp/orchestra/index.html
お茶の水管弦楽団ウェブページ
http://plaza12.mbn.or.jp/~tominaga/ochakan/
岡山大学交響楽団ウェブページ
http://www.okayama-u.ac.jp/user/club/bunka/orche/index.html
金沢大学フィルハーモニー管弦楽団ウェブページ
http://square.millto.net/~tsuji/
九大フィルハーモニーオーケストラウェブページ
http://rcweb.rc.kyushu-u.ac.jp/~qphil/main.html
上智大学管弦楽団ウェブページ
http://www.geocities.co.jp/Berkeley/2625/
筑波大学管弦楽団ウェブページ
http://www.geocities.co.jp/CollegeLife/1582/
中央大学管弦楽団ウェブページ
http://www.geocities.co.jp/CollegeLife/7900/index2.htm
東海大学管弦楽団ウェブページ
http://bosei.cc.u-tokai.ac.jp/~8jlm1114/
東京大学音楽部管弦楽団ウェブページ
http://webs.to/tuo
東京理科大学管弦楽団ウェブページ
http://www.ed.kagu.sut.ac.jp/~orche/index.html
名古屋大学交響楽団ウェブページ
http://www2.jimu.nagoya-u.ac.jp/circle/bunsaren/kokyogaku/index.html
大阪シンフォニカーウェブページ
http://www.sannet.ne.jp/osakasymphoniker/
大阪フィルハーモニー交響楽団ウェブページ
http://www.musicinfo.com/osakaphil/index.html
関西フィルハーモニー管弦楽団ウェブページ
http://www.musicinfo.com/kansaiphil/index.html

※ 各ウェブページの内容は、2000年10現在